

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 148号

平成26年8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

### 石館守三先生の文章より (10)

#### (「石館守三先生金曜会語録」より (5))

大切なことは、人間性、人格を高めようとする

高瀬先生のお話しになった人間の幸福について話があったが、私もそのようなことを話そう。今大学問題、理想像などが言われているが、戦後人間の理想像がなかった。先輩もそれを言う勇気がない。理想像のない時代、物質的欲求のみを追っている現代の中に生きる今の青年は不幸である。物質的欲求ではなくて幻をもって大学の門を出るのではなくてはならない。

大学時代キリスト者ではないが、学問の先生を、よい先生を持った。なりふりはかまわなかったが一つの信念を持っていた。人生は一つの芸術である。どんな芸術を作るかが問題だと言っていた。Life is art. これがその先生の言った卒業の時の言葉であり、私はこの

言葉を大切にしている。地衣を見ると世界のできたでき方が分かる、日本の地衣とヒマラヤの地衣が似ている、これは日本とヒマラヤが一緒に出来たからであると言っていた。自然科学者としてよい先生を持ったことはよかったと思っている。

吉田松陰の言葉「諸君は功名をなせ。われは大義をなす」大義のために尽くす。義のあることを世に示す。明治を指導するよき指導者であった。大切なことは人間性、人格を高めようとすることであり、物質的なものを増すことではない。人格の尊さを味わうことである。そういうことが大切だということが今は教えられていない。

(昭和 44 年 5 月 9 日 金曜日)

## 人生は“出会い”の連続

新人が同志会に入寮するのはきわめて偶然である。しかしどのような意味があるかは過ぎてみないと分からない。後で気がつく。縁故等でなく偶然である。次の時代を担う人々に家庭を開放し、キリスト教の精神を身につけるということである。先輩が来て席に連なるのも同志会への感謝があるからである。

生まれながらのものは遺伝による。肉体的なものは確かにそうだが、人格的なものは後に形成される。同じ環境に生まれても育ち方で異なる。それは“出会い”というものをいかに自分のものとするか、どう受け止めるかによる。

同じ親、先生、説教でも受ける人によって変わって来る。私の兄弟も同じである。感謝するのは良い小学校時代の先生を得た。両親から儒教の忍耐力、仏教の慈悲の心を受けた。青年になってから偶然に同志会にきて、良き先生、友人を得たということである。本当に引っぱられたとも言い得る同志会だが、3年間で生きる方向に大きなものを得た。人生は“出会い”の連続であり、いかに受け止めるかである。それは聖書にあるように自分を誇らず批判することなくあることである。

(昭和44年9月19日 金曜会)

## キリストに出会うことの重大さ

無心に聖書を読む。頭の良い者ほど多くのことを批判する。社会をそして聖書を。これはたいへん危険である。どうか神と人間の関係について謙虚に尋ね求めてもらいたい。それが出来ればそれ以上に同志会の存在の意味はない。真にキリストと出会う。それは単なる理性だけでは出来ない。神から与えられた恩恵である。人生は出会いである。同志会における生活でキリストと出会うことの重大さを知ってもらいたい。

(昭和 44 年 9 月 19 日 金曜会 署名式)

## 宗教は実践の中にある

大切なことは（自分もあやまったのであるが）門のまわりをぐるぐるとまわっていては駄目だということです。内に入ってぶつかって行かねばいけません。キリスト教とは神と自分との対決であり、これが宗教の本質なのです。

自己とは他者ばかりの関係で人を見るのではなく自己と神との関係で対決しなければいけないと思います。復活とか処女降誕等には謙遜をもって立向かう必要があると思います。我々の知識では理解できないものがあるということを考える必要があると思います。宗教は神学の中にあるのではなく、生活の中にあると思います。やはり知識や理屈の中ではなく、実践の中にあるのではないかとと思う。

（昭和 45 年 2 月 6 日 金曜日）

## 初心に帰れ

同志会にいる間に考えてもらいたいこと。初心に帰れという言葉。この初心を大事にしたい。同志会においてどういう考えを抱いたか。そしてどういう vision をもつに至ったかについて。

do と be の問題であるが、希望ということが大切である。初心を思い起こすということが、社会にあって戦いながら若い時に考えたあの初心が湧き出でてくる。同志会を通して先輩を通して、いろいろな自分よがりの考えでなく、普遍的な精神の糧が非常に大切である。若い時の vision 、夢、本物が何かを考えたことが大切である。初心に帰れ。

(昭和 46 年 5 月 7 日 金曜会)

## 使命感から行なえ

いろいろなものの考え方をしている友人との話し合いによって視野が広がる。ものおじしなくなる。実験室でのみ活動しているとやはり視野が狭くなってしまふ。人間が閉じこもってしまふ。同志会においては人間の理想についてなどの discussion (議論) により人間形成のためになった。精神的基礎の上に立つ先輩後輩の通じ合いこそ大切なものでそこに運動クラブとの違いがある。

いやだけれどやらざるを得ないからやったというような仕事は私心がないから成功する。功名心ではなくて使命感から行なうこと、自分には自信がなかったがやらざるを得ない、求められてやるというものが本物だと思うよ。しかしいくら求められてやったからと言っても基本的な線、すなわち自分というものを生かして社会のために尽くすという信念が必要であるのはいうまでもないことである。

私は薬を通して世のために貢献しようと思った。ビタカンファなども契約などはしていない。製薬会社には「それで儲けたら社会に還元してほしい」と言っただけだ。…

(昭和 46 年 6 月 18 日 金曜日)

## 信仰とは何か

諸君に考えてもらいたいこと。信仰とは何であるか。私の考え：  
へブル書 11 章 1 節「信仰とは、望んでいることを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」望んでいることを確信し、見ていないことを信じこれを行なうことであると私は思う。迷信との区別はこれを実行すること。へブル書 13 章 7 節「神の言をあなた方に語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。」

証しをするために指導者たちの証しを見、生活の最後を見て信仰を学べ。最後が大切。信仰をいまだ見ないものであると共に先人を模倣する、これが信仰。これを迷信と笑えない。科学に対する信仰がある。ところが現状を見ると極めて不安定な偶像に過ぎぬ。自分を信ずるその自分も偶像である。これを反省すべき。真の信仰はそうではなく分からないという一点に凝集する。

文学者、社会学者は実行が欠けているから棄教しやすい。自然科学者には実験があるからそうでもない。ものの判断はキリストならどう思うかという風に考える。これが私の生き方である。

(昭和 46 年 7 月 16 日 金曜日)



## 日本の良さ

米英独と旅行して一昨日帰国した。米は7年ぶりでワシントン、ニューヨーク、ボストン（阪井先生、高瀬先生、高畠先生の行かれた地）ワシントンとニューヨークはかなり変わっていた。町はきれいであったが、そこを歩いている人間の姿がひどくなっている。自然は変化しないが人間の方の変化が甚だしい。……

ロンドンでは4年ぶりだが往年の華やかさはなくなっていた。青年が勝手放題をしているのが眼についた。長髪で汚らしい服装である。クロムウエルの生地ハンチングトンの研究所を訪問した。クロムウエルが通った小学校が今もその時のまま中学校として使われていた。英国ではクロムウエルのことをあまり褒めない。旧教を批判したため、旧教の人には受けが悪いのかもしれない。

外国人は日本人をうらやましがる。言葉が一つ、国は一つ、上から下まで大体教育はあるし、文字が書ける。文化の普及度も一様である。こんなにめぐまれた国があるか言う。かく恵み深いものを受けている日本は一体世界に何で貢献しようとしているのか考えてみる。日本の悩みはぜいたくな悩みだと思って帰国した。

（昭和46年10月8日 金曜日）

## 自分に与えられた仕事に全力を注げ

私の若い時を振り返ってみて同志会に入ったのは偶然。キリスト教はまだ霧に閉ざされて探し求めてはいたが、キリスト教がよいか、仏教がよいか、その他の思想がよいかと迷う。同志会へ入った後聖書を学ぶことを覚え、また内村先生の門をくぐる。また白山教会のMiss モークのバイブルクラスに英語の勉強のなればと行く。Bible Class の話は平凡なものだが、生活の真摯さに打たれた。内村先生の場合も命がけでキリスト教に取り組んできた先生の生活態度、人生に打たれた。聖書の真理は先生の生涯をとうしてこれは本物だと思った。示されるだけでは本物にならぬ。自己中心—名誉、地位—気になっていた。聖書に接しているうちにだんだん取れてはいった。

就職を選ぶ時すでに戦いが始まる。月給のいいこと……。人に仕える生き方はいかなるものであるべきか。親が喜ぶ。バランス……と言った誘惑がまず発生。発生しなければためらうはず。人から低く見られようとも、収入は低くとも、人に仕えることが可能ならばそれを選ぶべきだ。その選択に失敗すれば30年、40年の無駄となる。次に結婚。大概自分が悪いが、これも失敗すれば一生の不作である。

そして諸君が活躍。キリスト教の判断とこの世の判断とは逆の場合が多い。それと戦っていかねばならぬ。義憤を感じることが多い。それは尊い。しかし自分は、と気づくばると自分の初心から脱線することが多い。社会事業、etc。自分の専門を台無しにすることが多い。クリスチャンには病的な者が多い。社会での自分の立場を守ることが留守にする。気をつけねばならぬ。初心は何か。神に対する誓いは何であったか。自分を何に捧げるかを分かっていないから、逃げ口上として社会問題に取り組んでいるかのようなポーズをとりつつ自らを慰める。

自分に与えられた仕事に全力を注げ。それを通して社会に仕えよ。センチメンタル的社会改革、社会改良をやる、命がけでなく単なる逃避的クリスチャンは問題であると思う。その人の生きる価値は何で決まるか。どんな人生をコツコツ人に仕えることを目指して生きて来たかである。業績ではない。家庭の主婦であれ、サラリーマンであれ、人を愛し人に仕えて来たというのが最高の人生である。

(昭和46年11月26日 金曜日)